

「研究動向」

## 日常倫理の人類学

— 関与・判断・主体性 —

## 一 はじめに

倫理学者の宇都宮によれば、倫理学とは、人間であるにふさわしい特性としての「人間らしさ」の意味における人間性(humanity)を探索する学問である。宇都宮はこのように倫理学を定義したうえで、学問としてのそれに無関心な普通の人びとも、自己や他者の行為や性格をめぐって倫理的に善いとか悪いという判断を下していると指摘し、「倫理はその意味で、われわれの生活に密着した事柄である」[宇都宮 二〇一九：二八]と述べる。

こうした普通の人びとの倫理を正面から取り上げ、人類学

的に探求する試みが、二〇〇〇年代以降の英米圏で盛んになされている。これらの研究群は、普通の人びと(ordinary people)による倫理(ethics)という意味で日常倫理<sup>1)</sup>(ordinary ethics) [LAMBK 2010: 1]と命名され、そうした取り組みが人類学の前提を転換させるという期待のもとに「人類学における倫理的転回」(the ethical turn in anthropology) [LAMBK 2010: 5, FASSIN 2014, MARTINGLY and THROOP 2018: 477-478]と称されることもある。

レイドロー (James Laidlaw) によれば、人間の行為や振る舞いを社会的な関係性や諸構造のなかで理解するという社会学的な説明は、対象となる人びとの倫理を分析の考慮に入れ

河野 正治

菊池 真理

オオツキ・グラント・ジュン

ないという限定のもとで成立しているに過ぎない [LAIDLAW 2014: 4-10]。これに対して、日常倫理の人類学は、普通の人びとの倫理を正面から取り上げることを通じて、人類学的な研究に新たな視点をつけ加えようとしている。

とはいえ、たとえば道徳哲学や徳倫理学との対話を始める [LAIDLAW 2014] といった外<sup>2</sup>向きの努力を別にすれば、日常倫理を探索する人類学は、具体的にどのような試みであり、いかなる貢献を人類学にもたらしうるのだろうか。本稿はこうした問題意識から、日常倫理を主題とする幾つかの主要な研究を検討するものである。

## 二 他者の生への関与——不確かな世界の日常倫理

人類学者が対象とする人びとの生のなかには、彼ら自身の倫理がいかなる形で伏在しているのか。本節では、主にダース (Veena Das) の研究を検討する。彼女の研究対象は、かつて民族間の対立や大量虐殺を経験し、現在では貧困に苛まれるインド都市部の住民である。ダースは、こうした困難な状況を生きる人びとの暮らしのなかで、彼らの倫理が日常の生 (life) のなかで育まれる様相 [Das 2012: 136] を描くことによって、暴力や貧困を経験した人びとが生を再創造する過程を明らかにしている。<sup>4</sup>

ダースは、暴力的な行為や出来事の可能性が潜在する社会条件下において、日々の生活を構成する要素の自明性が危機にさらされる事例を報告する。たとえば、ある兄弟はインド

分割時 (一九四七年) の凄惨な暴力から姉妹を守ろうとした際、暴徒から守るために彼女たちを殺すことが愛の表現であるのか、それとも、信頼できるとは言い切れない人物に頼んで彼女たちを保護してもらうことが愛の表現であるのかという二者択一の選択に迫られた。この兄弟は愛をめぐる葛藤に直面し、愛という概念の自明性に疑いを抱くようになったという [Das 2007: 8]。ダースはこのように、何らかの暴力や不条理な経験に関与せざるを得ない人びとの日常を、社会世界に対する疑念で満ちたものと捉えている。そこにおける彼らの倫理は、あるべき世界や関係性を支える根拠や基準の自明性を疑うという「懐疑」 (scepticism) に基礎づけられているのである。

ダースは、このように不確かな社会世界という生の様態を示したうえで、人びとが他者の生に関与する過程に彼らの倫理が胚胎する契機を見いだす。ここでいう他者とは、一切の関係を持たない者ではなく、むしろ私であり得たかもしれない者や、私が過去生<sup>5</sup>で負い目を背負ってしまったかもしれない者のことである。たとえば、ある貧困家庭のヒンドゥー女性<sup>6</sup>は、彼女の息子の妻が婚姻直後に別の男性と駆け落ちして乳児をもうけて戻って来た際、自分になつた乳児と娘を「受け容れようとする情動的な力」 (the affective force of an attunement) [Das 2015a: 108] に突き動かされた。彼女はこの出来事を引き受け、彼らに対する寄り添い (attentiveness) を通じて、自己の運命と他者の運命を結びあわせた。この女

性の応答は、彼らを見捨てるか否かを自ら選択したというよりは、むしろ食べ物も水もなく乳児を抱いて家の入口に座り込んだ義理の娘の姿を目にした際に、その二人の存在が彼女に訴えかけた力から導かれたものである。ダースはこの事例から、自己の生を他者の生に関連づける情動的な力や他者への寄り添いを通じて、倫理的な感性が育まれると論じる。

こうした探求の姿勢は、より何気ない日々の習慣にも敷衍される。ダースは、インドの朝夕の習慣であるお茶の時間の事例から、あるヒンドゥー女性が砂糖やクリーム、器にかかわる個々の嗜好に応じてお茶を淹れ分けるという形で、家族や友人といった個々の対面相手に寄り添う点に注目する [Das 2012: 140]。ダースによれば、他者への寄り添いにもとづくお茶の淹れ分けは、その行為だけを取り出して普遍的な基準から倫理的な善し悪しを評価される類の実践ではない。むしろ、その行為に見られる寄り添いの感覚は「共にあることの倫理」 (the ethics of being-together) [Das 2015a: 83] に支えられ、その倫理のもとでこそ評価されうる。ここでいう「共にあることの倫理」とは、共在する他者の人間性を承認することにしかかわる感性を、他者の生に対する関与のなかで育むという倫理である。

このように、ダースは「共にあることの倫理」という倫理の様態に可能性を求めつつ、不確かな社会世界への懐疑という当事者の認識を、そうした倫理の条件と捉える。ただし、ランベク (Michael Lambek) が指摘するように、あるべき生

をめぐる基準がつねに確かではないことへの気づきは、ダースに限られなく [cf. LAMBEEK 2015: 38-39]。次節以降では、ダースと異なるアプローチとして、価値の共約不可能性 (incommensurability) を倫理の条件に置くランベクと、倫理的な主体形成を論じるレイドローとフォービオン (James Fabion) を取り上げ、日常倫理の条件と可能性がいかに論じられているのかを検討する。

## 三 選択の原理から判断の倫理へ

本節では、行為選択の倫理を検討する。この主題については、臓器移植の経済を研究する山崎が、日常倫理の人類学とは異なる視点から論じている [山崎 二〇一五: 五八―九四]。臓器を提供するという行為の選択は提供以前における当事者の同意に根拠づけられるが、そこには「臓器提供意思表示カード」に見られるように、決定以前と以後で当事者の意思が変わらな<sup>7</sup>という主体の同一性が想定されている。山崎はドナー家族が提供後に反省を経るなかで、過去の同意に対して懐疑的になるという苦悩の経験を描く。山崎によると、制度のなかで臓器提供という行為が遂行されることで、臓器提供の主体はその行為にかかわる責任を一手に引き受ける「ドナー家族」として立ち現れ、遺族としての立場とのあいだに葛藤を抱える。このように、山崎は、操作可能に思える選択肢から自由に選択する代わりに自ら責任を引き受けるといふ主体のあり方が、臓器移植の技術と制度のなかで構成さ

れることを明らかにしている。

自己決定を引き受ける主体がいかに構成されるのかを問う山崎の議論とは対照的に、日常倫理に関するランベクの議論は、そこから一歩立ち止まって、当事者自身が直面するジレンマや葛藤にとどまろうとする視点から行為選択について論じる。

ランベクは経済人類学の価値論を再検討する論考「LAMBEK 2008」のなかで、与えられた選択肢の価値が共約可能であるために当事者が確かな基準に沿って決定しえるという「選択」(choice)の次元から、人びとの倫理が要請される「判断」(judgment)の次元を区別する<sup>6)</sup>。

ランベクは、アリストテレスのいう「フロネーシス」(phronesis)の意味で「判断」という概念を用いる。「LAMBEK 2008: 145, LAMBEK 2015: 16」。すなわち、目的のための手段としての道具的な行為ではなく、善き生にかかわる目的と不可分な人びとの倫理を個別の状況にあわせて導く実践知である。「MYHRE 1998」。ランベクのいう「判断」とは(たとえばカネと愛のどちらを選ぶのかといった)諸価値の共約不可能性に直面するなかで、善き生に向けた行為を状況ごとと導く実践知である。そして、「判断」を伴う実践は、基準が不確かな状況のなかでそれ自体が未来の実践の基準になりうるといふ点で、異なる諸価値のあいだにより高次のメタ的な価値基準を打ち立てるメタ実践である。とりわけ供養の実施や他者への贈与はそれ自体が目的であるような実践であるため、

メタ的な価値基準の生産を導く「判断」の典型例とされる「LAMBEK 2008: 145-146」。

再び、山崎が提示する事例を取り上げよう。あるドナー家族は、臓器提供への同意を通してドナーの思いを実現させた一方、ドナーの身体が動くような状態で臓器を摘出したことに後悔の念を抱いた。ここには、ドナーの思いとドナーのいのちとの共約可能な関係に苦悩するドナー家族の立場が見て取れる。だが、その後のドナー家族が「臓器を提供してその先で生きている」と述べていることからわかるように、彼らはドナーの身体と臓器をメトノミーの関係で理解しなおすことにより、苦悩を乗り越えようとしていた「山崎 二〇一五・八七―八九、一〇二―一〇五」。こうした実践は、臓器に刻印された人格の承認という新たな基準を確立する「判断」を伴う実践であり、そのような代替的な基準の確立を通して、ドナーとドナー家族との関係をより善いものに再創造しうる実践であると考えられる<sup>8)</sup>。

このように、「選択」とは異なる「判断」としての人びとの倫理を理解するためには、彼らがいかなる諸価値との関係で葛藤を抱えるのか、諸価値の関係を再分節化するメタ実践がどのような実践であるのかを見ていくことが肝要である。さらに、自己決定の主体を超えた「判断」への注目は、いかに行為がなされるのかを問うのみならず、「判断」を身につける主体がいかに主体として構成されるのかを問うことにもつながる。次節では、その点に関するフリーコー(Michel

Foucault)の議論を参照しながら、倫理と主体の問題を検討する。

#### 四 自由と倫理——フリーコーの主体化概念を中心に

フリーコーによる主体化(subjectivation)の概念「フリーコー一九八七、二〇〇二a、二〇〇四」は、倫理と主体という主題に関して広く参照される。これは、レイドロウの言葉を借りるならば、「自己が自己に働きかけ自己を形づくるという面も含め、権力の諸関係のなかでいかに主体が形成されるのか」[LAIDLAW 2014: 101]を捉える概念である。倫理という主題に限れば、主体化とは、善き生に向けた倫理的な働きかけとしての自己との再帰的な交渉のなかで、主体が偶発的に生み出される過程を指す。フォービオンによれば、その過程において、主体は二種類の自由、すなわち(一)再帰的になるという自由と、(二)その自由の実践を可能にする自由を必要とする[Faubion 2011: 36]。彼はレイドロウとともに、この種の自由——倫理的な働きかけを通した主体化に不可欠な自由——を人類学的に考察している。

フォービオンはフリーコーの議論を踏まえ、主体の構成を「所与」の側面と「偶発」的な側面の合成物とみなす[Faubion 2011: 120]。フォービオンが取り上げるポルトガル人のフェルナンドは、生まれながらにして貴族であるという生得的な「所与」の側面と、高貴な振る舞いを身につけようとする獲得的で「偶発」的な側面をもつ。その際、「所与」

と「偶発」のどちらの側面も、高貴さの洗練という点で主体化にかかわる可能性の諸条件である。

フォービオンは、この観点から、フェルナンドの伝記的物語を再構成し、身体の治療や性的アイデンティティといった、さまざまな細部を散りばめながら記述する。この記述上の戦略を通して、フェルナンドの生において主体化にかかわる可能性の諸条件がいかに多様であったのかが明らかにされ、フェルナンド自身はそうした諸条件のもとで自己を形成し自己の環境との相互作用によって形成される主体として提示される<sup>9)</sup>。こうして見ると、フェルナンドの生は一見してさまざまな条件に拘束されており、西洋のリベラルな主体という意味では自由な主体であるとはいえない。だが、彼はまさにフリーコーのいう意味での自由を経験している。つまり、異なる可能性と向きあいながら、つねに善き生に向けた「判断」を練り上げているという観点に立てば、フェルナンドもまた自由な主体であるといえるのだ。

このような自由をめぐる主体の経験を理解し、自由な主体の多様なあり方に注意を払うならば、自由に関してどのような概念を提示できるのか。同じく自由の概念に関心を持つレイドロウは、エジプトの敬虔運動(イスラーム復興運動のひとつ)における女性たちの実践に関するマフムード(Maha Mahmood)の研究[Mahmood 2003]を取り上げ、人びとがどこでいかにして自由を経験するのか、どのような目標のために自由を育むのかを再検討する。

マフムードが取り上げる事例を紹介しよう。敬虔運動に参加する女性たちは、ひとつの徳として、神との関係にふさわしい行為を身体化するように教えられる。そのうちのある若い女性は姉妹との喧嘩に悩んでおり、怒りを覚えていると告白した。説教師はその怒りによって罪がもたらされることへの懸念から、その女性に対して「怒りを制御するよう我慢しなさい。神の命令だ」と伝え、喧嘩の際には神の御心を考えなさいと助言した。女性はその説教師の教えから神の御心に従うという実践を始めたが、次第に説教師の教えを意識せずとも、神の御心に従えるようになった。つまり、神の御心に従うことは個人の意思ではなく、敬虔に不可欠な実践の問題である [MAHMOOD 2003: 830]。マフムードはこうした事例をもとに、「自律したりベラルな主体」 [MAHMOOD 2003: 836] を超えた自由概念の必要性を訴え、より信心深く社会規範を身体化するよう自己に働きかける主体に言及する。

こうした敬虔運動の女性は、自律性を求めるという意味での自由を経験しているわけではない。レイドロローによれば、この実践における女性の主体は、神の下での真の自己を追求するために未来の自由を切り詰めて自由を実践する主体として捉えられる [LAIDLAW 2014: 154]。そのうえで、レイドロローは、自由は倫理的な行為にとって必要条件であるが、十分条件ではないというフーコーの指摘 [cf. FAUBION 2011: 37] にもとづき、自由な主体を構成するやり方にかんがりのヴァリエーションがあることを明らかにする。この議論によれば、

主体が身につける自由は、たとえば他者への依存や外的な強制からの自由を意味する「アウタルキー（自足性）」 [LAIDLAW 2014: 156] になる場合もあれば、主体の内的な一貫性や完全性を求める「アトラクシア（心の平穏な状態）」 [LAIDLAW 2014: 163] になる場合もある。

フオービオンやレイドロローの議論にもとづけば、自由のよくなるもの、民族誌的な探求を通して自由の概念を拡張し、自由の類型学を構想することも可能であろう。フーコーは自己の振る舞いに関する自由を「みずから行うことからひとが身を離し、それを対象として構成し、問題として考える運動」 [フーコー 二〇〇二b: 五二] であると論じているが、その探求はまさに主体化のさまざまな様態にかかわる思考を、明らかにだす作業であるといえる。

## 五 おわりに

本稿で取り上げた研究では、社会世界を疑う状況下でいかにして他者とともに生きるべきか (第二章)、モラル・ジレンマに直面するなかでいかに行為すべきか (第三章)、望ましい種類の人間になるために、自己との関係をいかに構成すべきか (第四章) といったように、普通の人びとが自らの置かれた状況にふさわしい行為や振る舞いを構成しようとするやり方が示された。この点に着目すれば、日常倫理とは、学としての倫理学と同じように、人間であるにふさわしい特性としての人間性の探求 [宇都宮 二〇一九] であると考えら

れる。

本稿では、そうした人間性が普遍的な基準に沿って探求されるのではなく、個別的な社会条件において独自のやり方で探求されることを具体的な事例研究から示してきた。ただし、個別的な社会条件への着目は、ともすれば、通文化的な比較という前提を通して、各々の社会条件に固有な倫理として人びとの倫理を本質化するという結果を招来しかねない。

むしろ、あるべき生をめぐる基準や仮定が確たる根拠をもたない状況で、人間の行為を導く倫理的な判断や思考が実践的に構成される点に注目すべきである。とりわけ本稿で示した諸事例からは、各々の主体が他者への関与 (第二章) や自己との交渉 (第四章) といった実践を通してより善い生に向けた代替的な基準を練り上げながら、その基準に応じて行為や振る舞いの様態を洗練させるといふ、倫理と実践の相互参照的な関係が見いだせる。

こうした倫理と実践の関係に着目すれば、日常倫理の人類学とは、人びとの倫理を固定的なものと思えず、むしろ、実践を通じて人びとの倫理が構成される多様なやり方を明らかにする試みである。今後より精緻に検討する必要があるものの、日常倫理の人類学の試みは、行為選択や主体形成をめぐる実践が人びとの倫理と不可分であるという気づきを通して、行為や主体に関する議論に新たな視点をつけ加え、人類学の営みを民族誌的にも理論的にも豊かにする可能性をもつだろう。

## 付記

本稿の内容は全体として筆者三人の合議にもとづく。ただし、個別の先行研究の整理については、菊池が第二章、河野が第三章、オオツキが第四章を主に担当した。

## 注

- (1) 日常倫理という名称は、日常言語学派への深い共鳴も含意する [LAMBEK 2010: 2]。
- (2) この点に関して、ダースは「超越的なものから」日常的なものへの「下降」 (a descent into the ordinary) [Das 2012: 134] という表現を通して、倫理に関する哲学的な省察ではなく、普通の人びとが生きる日常の細部に織り込まれた倫理にこそ目を向けるべきだと述べる。そのような探求によって、「非暴力」のような普遍的な概念に対して、人びとの生に埋め込まれた、より謙虚な概念を提唱できる可能性があるといる [Das 2015a: 115]。
- (3) ダースの研究の特徴は、暴力の問題を、言語化しえない領域も含めた当事者の経験から説明する点にある [Das 2007, Das 2015b など]。ファッサン (Dider Fassin) によれば、人類学における日常倫理への注目は、社会的なもの (the social) から経験的なもの (the experiential) へと移行研究関心の移行と重なる傾向にある [Fassin 2014: 430]。
- (4) ただし、ダースは暴力後の世界を取り上げつつも、「モラルの崩壊」 (moral breakdown) という契機にこそ人びと

の倫理が最もよく理解できるというザイゴン (Zarett Zigon) の立場 [ZIGON 2007] を批判し、むしろ終わりのない日々のなかで紡がれる倫理の複雑な様態を捉えるべきとする [Das 2015a: 113]。ザイゴンの主張には他の論者 [LAIDLAW 2014: 118-119など] からの批判もあり、日常倫理の人類学におけるひとつの争点である。

(5) ダースの理論を援用するものとして、田辺の研究がある。田辺は、インド・パキスタン分離独立時の凄惨な暴力の後に、住民が暴力から生き延びたという現実を了解できないままに他者とのつながりを再構築しなければならぬという事例を取り上げ、ダースの枠組みを用いて考察している [田辺 二〇一八]。

(6) 「選択」と「判断」の区別については、中川による整理も参照のこと [中川 二〇一八]。この枠組みを用いた事例研究に、老後の幸福をめぐる葛藤に直面した日本人高齢者がより善き生を求めて交渉する過程を「判断」と捉えるカヴェジヤ (Iza Kavedzija) の研究がある [KAVEDZIJIA 2016]。

(7) ランベクはラパポート (Roy Rappaport) の儀礼論 [RAPPAFORT 1999] を介して、ベイトン (Gregory Bateson) の影響を受けている。共約不可能な価値に直面して葛藤する主体の像 [LAMBEK 2008] は、論理階型の違いを理解せずにダブルバインドに陥る主体の像 [ベイトン 二〇〇〇] と似ている。ランベクはベイトンと同

様に、より高次の論理階型にあるメタ的な基準の発見によって葛藤を解消しようと論じている。

(8) こうした臓器との関係構築を善き実践とみなさず、むしろ人格的な語りを制御し、死者を適切に弔うことによつて、苦悩や葛藤から抜け出す道を探るドナー家族も少なくない [山崎 二〇一五: 一〇三—一〇五]。臓器移植の経済において、より善き生に向かう「判断」のあり方は、当事者の置かれた状況によってさまざまでありうる。

(9) フォービオンの記述は、フェルナンド自身とマークス (George Marcus) が共同執筆した著作 [MARCUS and MASCARENHAS 2005] にも依拠している。自己と世界制作の形態としての自伝的叙述については、フィッシャー (Michael Fischer) による一連の研究 [「マークス／フィッシャー 一九八九」FISCHER 199] も参照のこと。

(10) フォービオンの民族誌では、(地の文とは異なる) 括弧で囲まれた文という形式で挿入されたフェルナンド自身のコメントが、地の文に書かれた著者の記述に見解を示したり、事実を訂正したりする。こうした複数見解の並立により、フェルナンドの主体化に際して「所与」と「偶発」がそのままに相互作用する過程がテキスト上で実演される。

#### 参考文献

宇都宮芳明 二〇一九 (一九九七) 『倫理学入門』筑摩書房。  
田辺明生 二〇一八 「生き延びてあること」の了解不可能性

から、他者とのつながりの再構築へ——インド・パキスタン分離独立時の暴力の記憶と日常生活」田中雅一・松嶋健(編)『トラウマ研究Ⅰ——トラウマを生きたる』京都大学学術出版会、四九五—五二〇。  
中川理 二〇一八 「価値と倫理」奥野克己・石倉敏明(編)『Lexicon——現代人類学』以文社、二二四—二二七。  
フーコー、ミシェル 一九八七 『性の歴史Ⅲ——自己への配慮』田村徹(訳)、新潮社。  
—— 二〇〇二a 「倫理の系譜学について——進行中の作業の概要」守中高明(訳)、石田英敬(編)『ミシェル・フーコー思考集成X——倫理／道徳／啓蒙』筑摩書房、六九—一〇一。  
—— 二〇〇二b 「論争・政治・問題化」西兼志(訳)、石田英敬(編)『ミシェル・フーコー思考集成X——倫理／道徳／啓蒙』筑摩書房、四四—五三。  
—— 二〇〇四 『主体の解釈学——コレージュ・ド・フランス講義 一九八一—一九八二年度』廣瀬浩司・原和之(訳)、筑摩書房。  
ベイトン、グレゴリー 二〇〇〇 『精神の生態学』佐藤良明(訳)、新思案社。  
マークス、ジョージ／フィッシャー、マイケル 一九八九 『文化批判としての人類学——人間科学における実験的試み』永測康之(訳)、紀伊國屋書店。

山崎吾郎 二〇一五 『臓器移植の人類学——身体への贈与と

情動の経済』世界思想社。

Das, V. 2007 *Life and Words: Violence and the Descent into the Ordinary*. Berkeley: University of California Press.  
—— 2012 "Ordinary Ethics." in D. Fassin (ed.) *A Companion to Moral Anthropology*. Oxford: John Wiley & Sons, Inc. pp. 133-149.  
—— 2015a "What Does Ordinary Ethics Look Like." in M. Lambek, V. Das, D. Fassin, and W. Keane (eds.) *Four Lectures on Ethics: Anthropological Perspectives*. Chicago: The University of Chicago Press. pp. 53-125.  
—— 2015b *Affliction: Health, Disease, Poverty*. New York: Fordham University Press.

FAUBION, J. 2011 *An Anthropology of Ethics*. Cambridge: Cambridge University Press.

FASSIN, D. 2014 "The Ethical Turn in Anthropology: Promises and Uncertainties." *Hau: Journal of Ethnographic Theory* 4(1): 429-435.

FISCHER, M. 1991 "The Uses of Life Histories." *Anthropology & Humanism Quarterly* 16(1): 24-27.

KAVEDZIJIA, I. 2016 "The Good Life in Balance: Insights from Aging Japan." *Hau: Journal of Ethnographic Theory* 5(3): 135-156.

LAIDLAW, J. 2014 *The Subject of Thrice: An Anthropological Ethics and Freedom*. Cambridge: Cambridge University Press.

- LAMBEK, M. 2008 "Value and Virtue." *Anthropological Theory* 8(2): 133-157.
- 2010 "Introduction." in M. Lambek (ed.) *Ordinary Ethics: Anthropology, Language, and Action*. New York: Fordham University Press. pp. 1-36.
- 2015 *The Ethical Condition: Essays on Action, Person, and Value*. Chicago: The University of Chicago Press.
- MAHMOOD, S. 2003 "Ethical Formation and Politics of Individual Autonomy in Contemporary Egypt." *Social Research* 70(3): 837-866.
- MARCUS, G. and F. MASCARENHAS 2005 *Ocasito: The Margins and the Anthropologist, a Collaboration*. Walnut Creek, CA: Altamira Press.
- MATTINGLY, C. and J. THROOP 2018 "The Anthropology of Ethics and Morality." *Annual Review of Anthropology* 47(1): 475-492.
- MYHRE, K. 1998 "The Anthropological Concept of Action and Its Problem: A 'New' Approach Based on Marcel Mauss and Aristotle." *Journal of the Anthropological Society of Oxford* 29(2): 121-134.
- RAPPAPORT, R. 1999 *Ritual and Religion in the Making of Humanity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ZIGON, J. 2007 "Moral Breakdown and the Ethical Demand: A Theoretical Framework for an Anthropology of Moralities." *Anthropological Theory* 7(2): 131-150.
- (かすの・まねたる 日本学術振興会／京都大学)  
(あへや・まり 筑波大学大学院)  
(おせしあ・へふたふ・じゅういん ウィクトリア大学 ウェリントン校)